
かなたへ 第十九部 ハンドメイド・ジュエルズ Handmade Jewels

U B O B

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かなたへ 第十九部 ハンドメイド・ジュエルズ Handma
de Jewels

【Nコード】

N8028M

【作者名】

UBOB

【あらすじ】

「古泉君とキヨン、今年は何がしたい？」
ハルヒのこの一言で俺達の苦勞は始まった。

(前書き)

かなたへ 第十八部 冬物語拾遺

<http://ncode.syosetu.com/n5397m/>

の続きです

冬期生活訓練合宿と称する北の大地でのスキー修学旅行から雪男と遭遇する事もなく無事帰還し慣れぬ筋肉を使った痛みから漸く解放されこれで二年生の全行事は終了したと思ったのもつかの間。当然ハルヒがそれだけで満足するはずもなく、引き続いて散弾銃の弾の如く襲いかかる高速の豆から逃げ惑うという意味不明な豆まきの後ハルヒ達とならんで恵方を向いて黙々と特大の巻き寿司を一本腹に収めるという次なる行事をなんとか無事終え朝比奈さんのいれてくださった番茶にほっと一息ついているといきなりハルヒが俺と古泉の前へつかつかと歩み寄ってきた。

どうした、食い足りないのか？ 済まん、もう巻き寿司は残っていないぞ。

「そんなんじゃないの、もう節分行事は終了、既に私の心は遙か未来を見据えているわ。」

そこで質問なんだけど、古泉君とキョン、今年は何がしたい？「今年こそははつつがなく過ごせればそれで十分だ、俺は一切何もしたくない。」

「涼宮さん、申し訳ありません、何に關しての質問か教えていただけるとありがたいですね」

「十日後にせまった行事といえは、分かるかしら？」

「なるほど、バレンタインですね。」

昨年は肉体労働の末に大変すてきなプレゼントをいただき感激したのですが、涼宮さんとしては今年も同じようにして私どもをビックリさせることは難しいだろうからプレゼントをいただくために支払うべき対価を私どもに選べと仰っておられるんですね」

「そうとも言っわ。さすがに古泉君ね。キョン、あんたももつとしっかりしなさいよね」

その顔は、嫌だと言っても許してくれそうにないな、今から十日

で何をすれば良いんだ。

「涼宮先輩、私達は手作りするんですよね？　だったら古泉先輩やキョン先輩にもなにか手作りしていただけたら嬉しいです」

「出作りも良いけど、キョン、どこかで宝石でも一山掘り出してきなさいよ」

こいつ、また俺達に穴掘りをさせるつもりなのか？

「そうね、真心がこもっていてぴかぴかと光り輝くもの、どう、具体的に良いんじゃない？」

「そんな、キョン君達、そんな無理しちゃダメですよ」

「まあいいわ、あんた達でよく考えて。お互いに何をしてるか分かったら詰まらないじゃない、これから14日までは男子と女子は別行動の団活にするわ、古泉君、良いわね？」

「はい、かしこまりました」

おい、古泉、そんなに安請け合いして良いのか？

その日の帰り道、不本意ながら結局学校帰りにハンバーガーショップの一角で紙製のカップに注がれたコーヒーを前に俺と古泉とで打ち合わせをする羽目になった。何も無いところからハルヒが満足する何らかの物を手作りすると非常に大変だろうからプランだけでも急いで建てちまおうという算段だ。

「本当のところは貴方に今すぐにも宝石を掘り当てに出かけていただくのが一番なのですが、例えば貴石であっても、ええ、貴重な石の方の貴石です、それですら専門家の指導があっても素人には掘り当てる事は難しいでしょうね。涼宮さんが掘られたらいったい何が出てくるのか僕としては興味がありますが貴方では百パーセント無理でしょう。だからといって買ってきたものでは涼宮さんは満足されません。」

これには僕も正直お手上げですよ。ここは本当に貴方のアイディアと働きに期待しなくてはならないと思っています」

そう顔を近づけて深刻そうに言うな、近すぎるぞ、顔が。

飲み終えた深緑色の紙コップを何の気なしに天上の光にがざし何か良い案が浮かばぬ物かと考えていた俺に、その瞬間、ぴーん一つのアイデアが 浮かんだ。

「なあ、古泉、コレならどうだ？」

その日から俺達はネットで調べたり、機関から材料を取り寄せたり、写真部を拝み倒して暗室やら現像の道具を借りたり鶴屋さんのお屋敷から竹を分けていただいたりと必死の作業を夜なべで続けることとなった。コンピュータを使った一部の作業は長門とかなたに手伝って貰ったが、その所はナイショだ。

おかげでなんとか十三日の金曜日の夜にはハルヒ達を部室に呼んで出来上がった物を披露する事が出来るまでになった。色々とセッティングしている間、寒い寒いとぶうぶう良いながら廊下で待っていたハルヒを始め四人を暗幕を張った真っ暗な部室に案内する。

「済まないが此処に敷いてあるマットの上の座布団に座ってくれ、じゃ、古泉、スタートだ」

パチツとスイッチが入ると部室の天井からぶら下げた直径三メートルばかりの巨大な半球状の傘の内側に満点の星が輝き始めた。

そう、俺達は手作りのプラネタリウムを組み立てたのだ。コンピュータで作って印刷した原版を元に大きなリスフィルムとかいうフィルムシートに焼き付けて作った星が穿たれた真っ黒なフィルムを透明アクリルなんかで作った土台に貼り合わせ、EX電球とかいう特殊な電球を光源にして仕込んだもので作った本体から竹と紙で作ったドームに星々を投影したのだ。

「どうだ、ハルヒ、夏の星座だ、分かるだろ？」

「うん、凄い、部屋の中でこんなに凄い星空がみれると思わなかった、まるでお祖母ちゃんの家裏の畑で見上げたみたい、綺麗よ、素敵」

「キヨン君、凄いです、本当に二人で作っちゃったんですね、感激です」

「恒星の位置ならびに明るさも正確に再現されている。秀逸」

「キヨン先輩も古泉先輩も、凄いです、かなた、感激しちゃいました」

「お褒めいただき有り難うございます、本当に頑張つて作った甲斐があります」

「二人とも、合格よ。明日、たつぷりと義理の入ったチョコレートをプレゼントするわ、期待して午後三時に部室に出てらっしゃい」

その後、結局首が疲れるとかいつてみんなで部室の床に敷いたマットの上で仰向けになつて星空を見上げて堪能したのだが真つ暗なのを良いことにいつの間にかハルヒは俺の腕を枕にして仰向けになつて色々星座とか星の説明をし始めた。最初の間はベガがどうの、アルタイルがどうのという話を聞いてはいたのだが連日の疲れから俺はハルヒの声を子守歌に寝ちまつたらしい。ふと寒さに気がつく とプレネタリウムの灯りも既に消え、俺を覗き込む様に見下ろすハルヒの顔が暗闇の中に浮かんでいるのに気がついた。他の連中は帰つちまつたのか？ 見ると俺の体には俺のジャンパーとハルヒのダウンのジャケットが掛けてある。

「もう、キヨンつたら信じられない、よっぽど疲れてたのね。あんまり起きないからみんな帰らせたわよ」

ハルヒに引つ張られるようにして起き上がる。はらりと落ちたハルヒのジャケットを拾おうとした瞬間、暗闇で俺はハルヒを抱きしめるような型になつてしまった。

う、ゴメン、その、わざとじゃないんだ。

「ばか、分かつてるわよ」

ハルヒは俺に抱きつき返すと、トンとおれの足を踏んづけてぱつと身を離れた。

「電気、点けるわ。さ、用意して、帰るわよ」

ま、そんなこんなで翌日俺達は無事チョコレートを入手する事が出来た、どんなのチョコかって？

そこはご想像にお任せしよう。

（後書き）

次は

「かなたへ 第二十部 朝比奈さんの卒業」
です。 お楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8028m/>

かなたへ 第十九部 ハンドメイド・ジュエルズ Handmade Jewels

2010年10月8日13時57分発行